

## 《研究ノート》

# アメリカの大スター、ナンシー・梅木の日本における表象に関する考察 -渡米後からアカデミー賞獲得までの雑誌、新聞記事の分析を中心に-

俣野 裕美

### 1. はじめに

本研究ノートでは、ジャズ歌手で女優のナンシー・梅木が、日本のメディアでどのように表象されてきたのかを分析する。ナンシー・梅木を巡る先行研究では、冷戦のイデオロギーの下、アメリカのメディアの中で従順な日本人女性として描かれてきたという指摘は行われている。しかし、日本において彼女がいかにか表象されてきたかについては、研究の蓄積がほとんどない。そこで本論では、渡米後からアカデミー賞受賞までの報道を分析して彼女の表象の変遷を辿り、社会的背景とともに考察を行う。

### 2. ナンシー・梅木とは

ナンシー・梅木（以下、ナンシー）の経歴について概略を示しておきたい。ナンシーは本名を梅木美代志といい、1929年に北海道の小樽市で9人兄弟の末っ子として生まれた。札幌の米軍キャンプで通訳をしていた兄には多くの米兵の友人がおり、ナンシーは自宅に遊びに来ていた彼らから音楽を学んだ。後に接収された劇場や米軍キャンプなどで歌い、次第に人気を博すようになる<sup>(1)</sup>。1948年には東京へ行き、角田シックスというバンドの専

属ボーカリストとなった。雑誌『スイング・ジャーナル』の人気歌手投票では、1951年から53年にかけて一位を獲得するほどの地位を確立した。ナイトクラブやコンサート、ラジオ番組、『青春ジャズ娘』(1953)などの映画にも出演し、戦後日本におけるジャズのパイオニアとなった(久須美 2016: 94; ビクターエンタテインメント公式ホームページ)。

1955年の7月、浅草の国際劇場でショーを行った後にアメリカに渡る。名前を Miyoshi Umeki(ミヨシ・ウメキ)に変え、クラブやテレビ番組などで仕事をしていましたが、1956年に出演したタレントスカウト番組、『アーサー・ゴッドフリー・ショー』で大きなチャンスをつかむ。観客からの拍手の大きさを最優秀者を決める形式のこの番組で、ナンシーは着物姿でジャズナンバーを歌い、観客はオーディオメーターが振り切れるほどの拍手を送った。この出来事を機に、ナンシーは一躍有名となった。その後、マーキュリー・レコードの専属となり、二枚のレコードを発売した。当初の滞在予定は三ヶ月であったが、その人気により帰国の日は引き伸ばされていった(久須美 2016: 94; 片岡 2014: 97-98; 後藤 2016: 6)。

1957年にはマーロン・ブランド主演の映画、『サヨナラ』に出演し、米兵と婚約中の日本人女性、カツミという役を演じる。翌年にはこの役でアカデミー助演女優賞を獲得し、アジア人初のオスカー女優になった。同年、ブロードウェイにも進出し、ミュージカル『フラワー・ドラム・ソング』で中国系アメリカ人のメイ・リーを演じ、2年間ものロングランを務めた。ナンシーの演技は高い評価を得て、トニー賞の候補にも選ばれた。1961年に製作された映画版でも同じ役を演じ、ゴールデン・グローブ賞のコメディ・ミュージカル部門にノミネートされている。その後も映画や劇場、ナイトクラブ、テレビ番組などで歌や芝居の仕事が続けた。1969年には『エディの素敵なパパ』(原題 *The Courtship of Eddie's Father*)というテレビドラマにレギュラー出演し、ミセス・リビングストンというハウス・キーパーの役を演じた。ナンシーはこのドラマの出資者の一人となり発言権まで持っていたが、3シーズン続いたこのドラマが終了した1972年、芸能界から引退をしている(久須美 2016: 94; 片岡 2014: 91-93; 俣野 2015: 71, 78)。

ナンシーの幼少期について、小学校時代の友人は、当時聞いたこともないにぎやかな歌を口ずさむ彼女を「モダンな子だった」(『北海道新聞』2007年9月7日)<sup>(2)</sup>と評している。またナンシー自身も幼い頃を回想し、「わけても外国映画がとても好きで、映画を見ては外国に夢を追っていました。」(『週刊東京』1959年9月26日)<sup>(3)</sup>と述べ、映画を通してアメリカを夢見たと言うほど、自他ともに認めるモダンで、外国、特にアメリカ好きな子供であった。芸能界を引退した後もアメリカに住み続け、晩年は養子に迎えた息子や孫と暮らし、2007年に亡くなっている(久須美 2016: 94)。

### 3. ナンシー・梅木を巡る先行研究

ナンシーに関する研究は、彼女がアメリカで出演した映画やテレビ番組などで演じた役柄の表象分析を中心に行われている。中でも、ナンシーがアカデミー賞を獲得した映画、『サヨナラ』で演じたカツミの表象についての分析が目立つ。この映画は、朝鮮戦争の休暇で日本を訪れた空軍のロイド（マーロン・ブランド）と歌劇団に所属するハナオギ（高美以子）との恋愛を描いたものだが、サブストーリーとしてロイドの同僚、ケリー（レッド・バトンズ）とナンシー演じるカツミの悲劇の愛も織り込まれている。作中のカツミは、ケリーと住む自宅に遊びに来たロイドに片言の英語を駆使して丁寧にあいさつし、着物で口元を隠して笑い、手ぬぐいや酒、料理の準備を献身的にこなす。また、ケリーが風呂に入る際には、カツミが彼の背中を流すシーンなどもあり、男性に尽くす姿が頻繁に登場する。アメリカ軍は米兵と日本人女性との関係を好ましく思っておらず、二人は後に来る別れを悲嘆して心中する結末を迎える。この二人とは対照的に、ロイドとハナオギは軍の反対を押し切って結ばれる(村上 1993: 172-175; Ono and Pham 2009: 67-68)。

異人種間の恋愛を扱うこの映画は、人種差別に反対する強い社会的メッセージを発しているものの、自己犠牲的かつ、白人のアメリカ軍人のための商品のように描かれた日本人女性の描写が目立つ。中でもカツミは、主体性を欠いた、男性に尽くす客体として描かれており、男性に従順なアジア系女性のステレオタイプ、「ゲイシャ・ガール」を反映しているといえる(Ono and Pham 2009: 68; 村上 1993: 158)。

第二次世界大戦後、『サヨナラ』のように、異人種間の恋愛を描く映画、特にアジアをテーマにした作品が多く作られるようになったが、これには日本とアメリカの関係が敵国から同盟国へと変わった冷戦構造が影響している(Lee 2017: 355; Klein 2003: 5, 233)。共産主義が広がることを恐れたアメリカの政策立案者たちは、敗戦後の日本の経済復興を通して、日本をアジアにおける資本主義のモデル国にし、共産圏の拡大を防ごうとした。このような中で、日本を「敵」とみなす戦時中の認識を改める試みがなされた。ハリウッド映画では、ハッピーエンドで終わる恋愛物語を用いて、エキゾチックで魅力的な日本を描き出すようになった。『サヨナラ』においても、エキゾチックな日本、女性化された東洋の姿を前面に押し出すことによって、日米の人種間の差異に寛容になることが訴えられている。ロイドとハナオギの愛のように、アメリカと日本は敵対心を癒し、人種間の違いを埋め、障壁を克服することができるというメッセージが込められているのである(Shibusawa 2006: 3, 260)。女性化された東洋を象徴する、男性に従順なゲイシャ・ガール、カツミもまた、こうした背景から生まれた人物であるといえよう。

このような先行研究から、ナンシーは冷戦構造を背景に、アメリカにとって望ましい日本人女性像の姿を演じて人気を得たといえる。言い換えれば、当時のアメリカのイデオロ

ギーを忠実に体現することで名声を得たのである。

しかし、ナンシーはアメリカのイデオロギーにのみ縛られていたのではない。1955年以降のナンシーはアメリカを主な活動の拠点としたが、渡米後も日本の雑誌や新聞をはじめとするメディアは彼女の近況を報じ続け、折に触れてインタビューを行っていた。またナンシー自身も、日本に帰国した際には、記者会見やコンサートを開催していた。ナンシーはアメリカで仕事をしている間も日本と深い関わりを持っていたのである。つまり、アメリカだけでなく、日本もナンシーに対して何らかのイデオロギーを課していた可能性があるのである。本研究ノートは、この点に着目するものである。

#### 4. 研究の手法

本研究で扱う資料について説明したい。ナンシーは日本でも映画やコンサートに出演していたが、その映像の多くは残っていないか、入手できない状態であった。そこで、ナンシーについて報じられた雑誌と新聞の記事を収集した。収集できた記事の中で、ナンシーはどのように表象されているのか、インタビューや寄稿記事の場合には、ナンシー自身が自己をいかに表象しているのかを分析することにした。

表象分析を行う理由については、スチュワート・ホルの理論に依拠する。彼は、アントニオ・グラムシのヘゲモニー理論をもとに、人や物を表象する行為には権力関係が潜んでいると指摘した。ある支配者グループは、社会的、政治的、イデオロギー的な力の交渉を繰り返すことにより、人々からの合意を得る形で権力を掌握していく。この交渉の中では、必ずしも支配力を持つ側が勝利するわけではなく、支配力を持たない側からの権力に対する抵抗も行われるという。表象もこうした権力のせめぎ合いが起こる場なのである。(Hall 1997: 269-272, 348)。ナンシーの表象を分析することによって、彼女に課せられた社会的なイデオロギーやそれに対する抵抗を浮かび上がらせることができると考えられる。

主として取り扱う期間は、1955年の渡米後から1958年のアカデミー賞獲得時の報道までとする。その理由は、現時点において渡米前と1958年以降の記事が断片的にしか見つかっていないことと、渡米後からの三年間はナンシーの芸能活動上、最も華々しいキャリアを築いた重要な時期であるからである。収集できた渡米前とアカデミー賞獲得以降の記事は、参考程度の扱いにとどめたい。以下では具体的な記事の文章を取り上げて、分析を行う。

## 5. 記事の分析

### 5-1. 渡米前：可憐な歌手

本研究ノートが対象とする渡米後の記事に入る前に、渡米前の記事について簡単に触れておきたい。上京から2年後の1950年、ナンシーのジャズ界での人気が徐々に上がり始めた頃、『スイング・ジャーナル』（1950年1月）で彼女を特集した記事が組まれた<sup>(4)</sup>。この記事の中で、ナンシーが人気を得るまでには「並々ならぬ努力が秘められて」<sup>(同上)</sup> いたとし、これまでの経緯がつづられている。アメリカ兵から歌のレッスンを受けていた頃のことについて、次のように述べられている。

「一言一句について細かい注意をされる。ナンシーがほとんど同じに発音したつもりでも、まだ彼には気に入らない。...[中略]彼女も、今さら発音のむずかしさに驚き、何度やめてしまおうと思った事だろう。」<sup>(同上)</sup>

英語の複雑な発音の難しさにつまづき苦しみながらも、米兵の厳しいレッスンに耐えるナンシーの様子が説明されている。さらに筆者は、辛口の批評にも腹を立てずに耳を傾け、向上しようとするナンシーの姿について触れ、「ひたむきな情熱を何時も、美しいと思つている。」<sup>(同上)</sup> と努力する姿に美しさを見出している。ファンから褒められた時には、恥じらいながら「「だつて私、自分の歌にまだちつとも自信がないの...こんな悪い聲どこがいいのかしら？」とおつしやる。」<sup>(同上)</sup> と、驕りを一切見せないナンシーの返答を紹介し、その謙虚さを称えている。また、「おつしやる」という敬語表現から、ナンシーをどこか高潔な人物として捉えていることが分かる。この記事のナンシーは、謙虚で愛らしい、将来有望な新人歌手として表象されているといえよう。

その他、『アサヒグラフ』（1950年10月18日）<sup>(5)</sup>と『家庭よみうり』（1953年8月11日）<sup>(6)</sup>では、女性のジャズ・シンガーたちの短いプロフィールを紹介する記事が特集されており、その中でナンシーも取り上げられている。また、『映画と演芸』（1954年3月）<sup>(7)</sup>では、ファンの行動や辛口の批評に困惑しながらも、感謝の気持ちを抱いているというナンシーのインタビュー記事が掲載されている。発見できた記事の本数が少ないため、渡米前の表象の傾向を断定するには至らない。しかし、1951年から53年にかけて『スイング・ジャーナル』誌の人気投票で一位に輝いたことも相まって、この時期のナンシーの表象はおおむね好意的で、可憐でひたむきなジャズ・シンガーとして捉えられていたと推定される。渡米後には、ナンシーの性格を非難する記事も見られるため（5-3.で後述）、否定的な記述が存在する可能性もあるが、上記のように、謙虚で愛らしい歌手として表象されていた一面があったといえよう。

## 5-2. アメリカ滞在中：アメリカのスターとしての自己像

ナンシーが渡米した後も、彼女をひたむきで可憐な歌手として表象した記事がある。1955年9月の音楽雑誌『ミュージック・ライフ』は見開き一ページを使って、アメリカに渡ったナンシーのインタビューを掲載した<sup>(8)</sup>。ナンシーについて、「言わずと知れた戦後派ジャズ・シンガー中のヴェテラン」と評し、以下の紹介文が続く。

「彼女の出現はジャズブームの一起因となった事はいなめまい。そのシンガーとしての十年に近い経歴はようやく唄の円熟として結晶しようとして居り、テクニカルな面での飛躍と共に、我が国初の完成されたシンガーが出現する日も遠くはないであろう。」<sup>(同上)</sup>

ナンシーをジャズ界に欠かすことのできない人物の一人と位置づけ、長年の努力で培った経歴により、完成された歌手になりつつあることが示されている。この記事は渡米したナンシーを特集したものであるため、「我が国初の完成されたシンガー」とは、アメリカでさらに磨きをかけることによって達成されるという前提があると考えられる。また、この紹介文に続くインタビューでは、歌手を志した動機、趣味や好きな色、理想の男性のタイプなどの質問があり、ナンシーをアイドル的な愛らしさを持って描き出そうとしている。この記事のナンシーは、従来からのひたむきで愛らしい性質に加えて、アメリカからの帰国後に日本を代表する歌手に成長する人物として表象されている。

以降、渡米後のナンシーに関する報道は、彼女が『ミュージック・ライフ』と『スイング・ジャーナル』に約一年に渡って寄稿した記事が主となる。ナンシーの活動を報じる記事が少なかったのは、テレビやクラブ出演に追われて多忙を極めるナンシーに対し、インタビュー等の情報収集が十分にできなかったからだと推測される。この寄稿記事はナンシーからの手紙という形式で連載され、出演したテレビ番組や新しく決まった仕事の詳細、出会った歌手の様子、異国の地での失敗談など、多岐にわたる話題が取り上げられている。以下では、この寄稿記事の分析を通じて、ナンシーが自身をどのように表象したかを考察したい。

寄稿記事の中で最も特徴的なのは、ナンシーが自身をアメリカのスターとして表象している点である。例えば、歌手のメル・トーメに会った時のことについて、次のように書いている。「彼は大変お世辞が上手で「日本にこんな素晴らしいシンガーが居るという事は、日本のジャズの水準が如何に高いか解る…」なんて大変なホメ様でスつかりテレてしまいました。」(『スイング・ジャーナル』1956年1月)<sup>(9)</sup> また、出演したある音楽ショーで、大物歌手のキング・コールの直後に歌わなければならない、緊張した時のことを次のように述べている。

「テレビ司会者のハワード・ミラー氏（シカゴ第一のテレビ司会者）にキング・コールの前に歌わしてくれるよう申入れたのです。処が、「誰もが敬遠するところで貴方が立派に歌ったら、こんな素晴らしいことはないでしょう。ミヨシ、私は立派にあなたがやりとげるものと信じて、特にキング・コールの後を選んだのです。」（『ミュージック・ライフ』1956年7月）<sup>(10)</sup>

この二つの文章に代表されるように、ナンシーは音楽界やテレビ業界での有名人の名を多数挙げて、彼らがナンシーの歌の実力を高く評価し、厚い信頼を寄せていることに何度も言及している。また、ナンシーと有名人のツーショット写真を添えている記事もあった<sup>(11)</sup>。

さらに、ファンから熱狂的な支持を受けていることにも頻繁に触れている。「ファンレターも日一日と数がふえてとても読みきれ程ではありません。」（『ミュージック・ライフ』1956年4月）<sup>(12)</sup>、「これからもずーっと米国で誕生日を迎えることを望みます。何故なら貴女は我々の最も親しい友達であり、日米親善の上に最大の役割を果たす人だからです」（『ミュージック・ライフ』1956年7月）<sup>(13)</sup>というように、多数の熱烈なファンが存在し、ナンシーを日本に帰したくないと考えるほどに愛されていることを強調している。

約一年に渡る寄稿が終わりを迎え、帰国が近づく頃になると、今後の日本での活動について記すようになっていく。例を挙げると、日本とアメリカでは歌手の評価のされ方が異なることに触れ、アメリカの評価の方が正しいと思うと述べた後、「帰国したら色々な考えを發表したいと思って居ります。」（『ミュージック・ライフ』1956年10月）<sup>(14)</sup>と述べたり、親交のある著名なアメリカ人歌手の名をいくつか挙げて、「そんな人達と一緒に帰る事が出来たらどんなに素晴らしいだろうと思っておりますが、さて可能性と云いますか受入態制はどうでしょうか。」（『ミュージック・ライフ』1957年1月）<sup>(15)</sup>と問いかけたりしている。ナンシーは連載終了後もアメリカで仕事を続けることになるが、これらの文章からは、日本で仕事を再開しても、アメリカで培った知識や人脈を元に活動するという意志が感じられる。

このように、ナンシーは自身をアメリカで認められ、知識と人脈を得たスターとして自己を表象している。自身のことについて自らの言葉で語れる寄稿記事という場において、ナンシーは日本の読者、音楽関係者に何をアピールしたかったのだろうか。

アメリカに渡る直前のナンシーは、決して順風満帆なわけではなかった。新人歌手たちが台頭する中、ナンシーの人気は押され気味であったという<sup>(16)</sup>。また、江利チエミやナンシーのライバルとされたペギー葉山もアメリカに渡って歌手活動をし、日本に戻って仕事をしてきた<sup>(17)</sup>。このような状況の中、ナンシーはアメリカで高評価を得たことを今後の芸能活動における強みとしたかったのではないだろうか。渡米前と渡米直後に表象されていた可憐でひたむきな歌手像だけを忠実に追従するよりも、アメリカで実力を認められたスターとして自己イメージを構築することが、ナンシーにとっての今後の戦略であったのだ

ろうと考えられる。

### 5-3. 一時帰国：アメリカ性の否定と日本人性の強調

アメリカでの人気に伴い、当初三ヶ月のアメリカ滞在予定は延長され続けた。日本に帰ってきたのは、渡米から約一年半後の1956年12月、ビザの更新と映画『サヨナラ』の撮影のための一時帰国という形となった。冷戦下の日本ブームの雰囲気があったとはいえ、ナンシーはアメリカで知名度を上げ、目覚ましい活躍をした。そんなナンシーの帰国に、日本の報道の態度は必ずしも温かいものばかりではなかった。中でも特徴的なのは、ナンシーのアメリカ的な要素を批判し、彼女の日本人性を強調するような記事がみられたことである。

『週刊新潮』（1957年1月21日）は「行儀のなおったナンシー梅木一旅はよき人間をつくる」と題して、帰国したナンシーについて次のように述べている。

「日本にいる時から二世臭かった彼女、アメリカ一年半の滞在でますますバタ臭くなった。その彼女の帰国印象記―「一番日本らしいと思ったのは騒音。日活ホテルの部屋から、ゴ―ッという騒音を聞いて、日本に帰ってきたと思った」よし。」<sup>(18)</sup>

「二世臭い」性格が、アメリカでの滞在によりさらに「バタ臭」さを増したと、ナンシーのアメリカ人に似た性格が批判的に述べられている。また、一年半ぶりとなった帰国に際し、日本らしさを騒音という乱雑な要素と結びつけたナンシーを半ば呆れたように評している。後に続く文章では、渡米前の時間にルーズな性格が、厳しいアメリカのエンターテインメント業界に身を置くうちに、「…[中略]時間だけは正確になった。旅はさせるものだ。」<sup>(同上)</sup>と記事を締めくくっている。ナンシーがアメリカで達成したことは、時間に正確になったことだけであるとし、彼女がアメリカで達成した成果や人気などは無視されている。

また『週刊東京』は、「返り咲くかナンシー・梅木」（1957年1月19日）というタイトルでナンシーの帰国を報じた<sup>(19)</sup>。アメリカでの人気ぶりには触れているが、マーキュリー・レコードで制作したアルバムの内容が日本のレコード製作基準管理委員会に問題視されたことや、渡米中に家族に送金をしなかったことなど、様々な混乱がアメリカで仕事を引き受けたことによってもたらされているという調子で綴られている。そして、日本の芸能界はトラブルを抱えたナンシーにどのような対応をするのかと疑問を呈して記事が閉じられている。この記事は、アメリカでの仕事がプラスに働いているのではなく、日本での仕事に大打撃を与えていると示唆しているのである。



加えて、このタイトルには若干の違和感が漂う。確かに渡米中のナンシーは、日本では芸能活動を行っておらず、忘れ去られそうな存在だったかもしれない。しかしアメリカでは歌手だけでなく、女優としての仕事も決まっておらず、かつてないほどの大躍進の最中であつた。このことからすると、「返り咲くか」という表現は、当時のナンシーには幾分そぐわない表現である。アメリカでの人気を糧に、日本で更なる飛躍をする可能性も十分にあり、そのような期待は全く込められていない。この表現から、ナンシーが本来活躍する場は日本であり、アメリカでの成果は評価に値しないと捉えられていることが分かる。

このようにアメリカでの活動を否定する記事がある一方、ナンシーが日本人であることを強調した記事もある。1957年2月11日の『旬刊ラジオ東京』には、渡米経験のあるペギー葉山とナンシー梅木を、ジャズ界のバイオニアとして位置づけた記事が載っている<sup>(20)</sup>。ジャズ界を牽引する二人を評価する内容だが、「ナンシー梅木とペギー葉山—この、一見“二世風”の名前を持った二人のジャズ歌手は、いうまでもなく純粋な日本人。」<sup>(同上)</sup> という、二人が日本人であるという断言から記事が始まっている。ナンシーが、帰国時にアメリカよりも日本が良いと感想を述べたことに触れ、次のように続けている。「かつてアメリカに渡ることを人一倍強く希望していた彼女の中にも、やはり、日本人の血が色濃く流れていたのである。」<sup>(同上)</sup> とし、冒頭の文章と同様に、「日本人の血」という言葉を使って再度、日本人性が強調されている。

以降は二人の生い立ちにさかのぼり、いかにして両者の成功が築かれたのかが記されていく。ペギー葉山の生い立ちについては、裕福な家庭に育ったことが参照されているが、ナンシーについては、彼女の出身地である北海道の気候が引き合いに出されている。北海道の冬の厳しさについて、「このような自然の中で育った人間は、まず忍耐を要求される。...[中略]だから、ナンシー梅木が、あせりのない人生を踏み出したとしても何の不思議もない。」<sup>(同上)</sup> とし、ナンシーの性格形成に北海道が大きな影響を与えたと書かれている。不遇の時代にも、「かつてと同じように歌い、同じように振舞った。北国に生れ、育った忍耐がこの逆境に支えとなって彼女を大きくさせたのだ。」<sup>(同上)</sup> と説明し、歌手としての成功、アメリカで人気を得た理由を故郷に見出している。日本とナンシーは強く結びつけられているのである。記事の中では、ナンシーとペギー葉山の両者の日本人性が強調されているが、より強固な日本人としての枠組みが設定されているのは、ナンシーの方である。2章で述べたように、ナンシーは幼い頃から自他ともに認めるアメリカ好きな性格であつたことを考えると、日本人性が誇張され過ぎているといえよう。

このように、一時帰国した際のナンシーの表象は、渡米中の寄稿記事で自身が構築したアメリカのスターとしての自己像とは全く異なるものであつた。渡米中の成果はほとんど評価されず、ナンシーのアメリカ的な側面は性格の面でも仕事の面でも否定され、日本人

であることが強調されていた。

#### 5-4. アカデミー賞の獲得：理想を演じた「幸運」のオスカー女優

一時帰国後、ナンシーは再度渡米して仕事を続け、1958年には『サヨナラ』のカツミ役でアカデミー賞に輝いた。オスカー像を獲得したナンシーはどのように報じられたのだろうか。

受賞が決まると多くの新聞や雑誌が、日本人初の快挙を祝う見出しを掲載した。新聞は「ナンシー梅木が獲得 アカデミー女優助演賞」（『朝日新聞』1958年3月27日）<sup>(21)</sup>、「時の人 アカデミー最優秀助演女優賞を受賞したナンシー梅木」（『毎日新聞』1958年3月28日）<sup>(22)</sup>などの見出しを付けて速報を流し、雑誌も「初のオスカー賞に輝くナンシー梅木」（『週刊娯楽よみうり』1958年4月11日）<sup>(23)</sup>、「日本人で初めてアカデミー賞受賞のナンシー梅木さん」（『婦人生活』1958年5月）<sup>(24)</sup>などの記事を掲載した。着物姿でオスカー像を抱えるナンシーの写真も添えられ、受賞自体はおおむね好意的に伝えられている。

しかし、名優たちを押しつけてナンシーが賞を獲得したことは驚きを持って迎えられ、受賞の理由が様々に語られた。挙げられた理由には、主に二つの傾向がある。カツミという役が、アメリカ人男性の理想の女性像を反映していたからだとするものと、ナンシーが幸運であったからだとするものである。例えば、『映画と演芸』（1958年6月）は、受賞理由を以下のように書いている。

「『サヨナラ』で100%アメリカ人好みにデッチ上げられた大和撫子カツミ、それにアメリカ人の期待にこたえて好演したナンシー、彼女の人気の由来もおそらくこの辺にあるのだろう。」<sup>(25)</sup>

「デッチ上げ」などの言葉が用いられていることから分かるように、この記事には怒りや軽蔑の感情が込められている。理想の女性像を演じたことが評価につながったというのは正しい指摘ではあるが、その怒りや軽蔑の感情は、カツミという人物を作り出した映画関係者やアメリカ社会ではなく、ナンシー一人に向けられている。続く文章では、ナンシーの今後の活動は厳しいだろうと評して記事を終えており、ナンシーの実力は底が知れた程度のものだという印象を抱かせるものになっている。受賞を祝して書かれた記事ではあるが、その中身はナンシーを非難し、彼女の価値を下げるような内容である。

上の例のような記事が存在する一方、アメリカに対する優越感が込められた記事もある。『婦人朝日』（1958年6月）は、受賞の理由を以下のように述べている。

「カツミのような女性はアメリカの男性には夢の女性であり、そういうかねて評判にきいていた理想の日本女性の美德を目のあたりに見せられたアメリカ人の感動は私たちの想像をはるかに越えたものであったと考えられるのである。」<sup>(26)</sup>

『婦人倶楽部』(1958年5月)の記事では、ナンシーが演じた役には「アメリカ人が体験する“女性”とは正反対のものが出ている」<sup>(27)</sup>とし、次のように述べている。

「...[中略]アメリカ映画人は、ナンシーさんに賞を贈ることで日本女性の“婦徳(ふとく)”に賞を捧げた—もっとハッキリいえば、アメリカ女性のお高(たか)さに対するウップンを晴らした、ともいえないこともないのだ。私は決して、男性の背中を流す“婦徳”を認めないが、アメリカの男たちがこの女性像に感動した気持だけは、男の手前勝手とは別の意味で判りすぎるほど判るのである。」<sup>(同上)</sup>

この二つの記事はいずれも、アメリカ人男性を分析するような視点で書かれている。どちらもアメリカ人男性のカツミに対する感情を「感動」という言葉で表現し、アメリカ人女性からは期待できない従順さや優しさに接して、癒しを得る構図を示している。一つ目の記事では「想像をはるかに越えたもの」という言葉で、アメリカ人男性たちの鬱屈とした気持ちの深さを指摘し、次の記事では「判りすぎるほど判る」という言葉で、彼らに寄り添い、同情するような姿勢を取っている。ナンシーの受賞を媒体にして、アメリカ社会、特にアメリカ人男性を優位な立場から見下ろしているのである。二つ目の記事の「男の手前勝手」という言葉にあるように、ここで優位な立場に立って優越感に浸れるのは、日本人女性ではなく、日本人男性であろう。

また、ナンシーの幸運を指摘する記事もある。記事のタイトルを挙げても、「降ってきたアカデミー賞 女優助演賞に輝くナンシー梅木」(『サンデー毎日』1958年4月13日)<sup>(28)</sup>、「アカデミー賞に輝くナンシー梅木 私はラッキー・ガール」(『読切倶楽部』1958年6月)<sup>(29)</sup>などがあり、受賞が幸運と結び付けられている。『文藝春秋』(1958年6月)は、「ナンシー梅木はツイてる「どうにかなるわ」と言っていた彼女の言葉が本当になった」というタイトルで、日本でナンシーが犯した数々の失敗談を挙げながら、「どうにかなるわ」と楽観的に仕事をこなすうちに、アカデミー賞にまで行きついでしまったという調子の記事を掲載している<sup>(30)</sup>。実際の記事の例としては、以下のようなものがある。

「こうした献身的愛情の女性像とは、おそらくアメリカ男性にとって“ドリーム・ガール”(夢の乙女)ではないでしょうか。この役柄のよさと、それに惚れこんだ彼女の自然な演

技が相まってこの幸運をもたらしたわけ。」(『婦人生活』1958年5月)<sup>(31)</sup>

ここでも先の例と同様に、理想の女性像について指摘されている。ナンシーの演技の質にも一定の称賛が与えられているものの、最後は幸運に全てが集約されている。演技経験をほとんど持たないナンシーに「運」や「幸運」という言葉が使われたのは、自然なこととして捉えることができるかもしれない。しかし、単純にナンシーのもとに幸運が舞い降りただけとは考えにくい。5-2.で述べたように、渡米後、多忙を極めた仕事を通して得た名声と知名度なしに、カツミ役に抜擢されることはなかったであろう。また、ナンシー自身もインタビューで、「アカデミー賞という幸運をよく射止めましたネといわれるが私が結局死にも狂いであの演技と取組んだから、すなわち努力したからもらったのだと思っています。」(『毎日新聞』1958年5月14日)<sup>(32)</sup>と述べているように、受賞に至るまでには相当の努力があったのだと思われる。こうした努力や苦労、奮闘については、ほとんど真剣に検討されておらず、表面的な扱いにとどまっている。

アカデミー賞の獲得は表面的には祝福されたものの、その受賞理由の記述は、ナンシーの評価を低減させるものであった。カツミは理想の日本人女性像であるという指摘は正しいが、偽りの日本人女性のイメージを作り上げた映画や、それを楽しむアメリカ人男性に対して批判は行われぬ。役を引き受けたナンシー一人にその罪が着せられるか、日本人男性がアメリカ人男性に優越感を抱く道具として使用されるのである。さらにナンシーの努力や奮闘などは考慮されず、幸運だけでオスカー像を勝ち取ったのだと示唆されていた。一時帰国の際よりも一層、アメリカで知名度を上げたナンシーであったが、より巧妙な形でその功績が骨抜きにされている。

## 6. ナンシーの表象についての検討

ここまでは、渡米後からアカデミー賞受賞までの記事を中心に分析をしてきた。本節では、ナンシーの表象の社会的な意味を考察したい。ナンシーの表象の背景には、第二次世界大戦後の日米関係から生じたジェンダーの影響が考えられる。戦後、日本の男性たちは、敗戦とアメリカ軍の占領によってナショナル・アイデンティティを傷つけられ、深い屈辱感を味わった。その中で、米兵向けの売春によって生計を立てる女性、「パンパン」の存在は、アメリカに対する従属の象徴として機能したという。特に、日本人女性と米兵が親しく付き合う姿に日本人男性は深く傷つき、憎悪したとの指摘がある(井桁 2005: 86-93)。

ナンシーが渡米した1955年には既に占領は終わっていたが、こうした思想は50年代を通して受け継がれており、影響力を持っていたと考えられる。マイク・モラスキーは、ナンシーと同時期にジャズ界で活躍したピアニスト、秋吉敏子がアメリカ人と演奏をする姿

が雑誌記事で否定的に論じられている理由について次のように考察している。日本人男性は戦後、アメリカによる占領を恥だと思い続けていた。占領も朝鮮戦争も終了した 1955 年に、アメリカ人と演奏を行う秋吉を見ると、「わざわざ毛唐と付き合いたがるヤツ」と彼女が憎たらしく見え」（モラスキー 2005: 48）、「大和撫子」らしくない秋吉に敵意が向けられたという（同：46-49）。

これと同様の背景がナンシーの表象にも存在すると考えられる。渡米前のナンシーはひたむきで可憐な姿で表象されていた。渡米直後の記事でも同様のイメージで描かれ、アメリカの経験を経た帰国後に、日本を代表する歌手になるという期待が込められていた。ここまでの段階では、ナンシーとアメリカは深く結びついておらず、敵意を喚起するような存在ではなかった。つまり、「大和撫子」の範疇に収まっていたのである。しかしその後はアメリカで人気を得て、自身もアメリカのスターとしての自己を提示した。渡米前、直後とは異なり、アメリカと良好な関係を持つナンシーは敵意を喚起する存在となり、受け入れることができない。そのため、アメリカ的なナンシーの要素は性格の面でも仕事の面でも否定され、日本人であることが強調されたのである。アカデミー賞の受賞では、日本人初の快挙としては喜ぶものの、ナンシーがアメリカで本格的な評価を得た姿を直視することはできない。それゆえに、彼女を偽りの日本人女性を演じたとして非難し、受賞は日本人男性がアメリカ人男性よりも上位に立って優越感に浸るための道具となった。さらに、幸運という言葉によってナンシーの受賞の価値を低減させたのである。

## 7. 抵抗する主体としてのナンシー

最後に、ナンシーという人物そのものについて考察したい。先行研究の章で示した通り、ナンシーは冷戦下のアメリカのイデオロギーに沿って、従順な日本人女性像を演じた。この点から考えると、ナンシーはゲイシャ・ガールとして権力に忠実であることで人気を得たといえる。しかし、日本に焦点を当てると、別の側面が浮かび上がる。ナンシーは寄稿記事の中で、アメリカのスターとして自己を表象した。これはナンシーの戦略の一環ではあったと考えられるものの、日本におけるイデオロギーに反する姿で自己を提示した。また、帰国時にアメリカでの仕事や人気が否定的に語られた後でも、インタビュー等を通してアメリカで活躍する自身の姿を見せ続けた。自身の日本人性をアピールする方が日本社会に受け入れられやすかったであろうが、そうはしなかったのである。

ナンシーのイデオロギーに反する、オルタナティブな姿は、次のような言葉でも示されている。一時帰国の際のインタビューでは、「向こうへ行行って日本のことをゆっくり考えて、アメリカでしたことはいま帰って来てゆっくり考えています。今度は二つの国をヨーロッパへ行行って考えましょう。」（『放送朝日』1957年3月）<sup>(33)</sup>と答えている。また、メリ

カでばかり仕事をするナンシーに、日本を捨てたのではないかという批判が上がっていることに対しては、「私は仕事の間を日本だ、外国だと限らずに広くみてどこでもいいから一番よい仕事をしていきたいと思っています。」(『婦人朝日』1958年10月)<sup>(34)</sup>と回答している。ナンシーは、国によって枠組みを作る従来型の固定的な考え方を否定し、流動的で幅広い視野を持ち、国際的に仕事をする自身の姿を提示している。ナンシーは、権力に従順なゲイシャ・ガールであっただけではなく、押し付けられた規範に抵抗する姿を提示し続ける人物でもあったのである。

本研究ノートでは、限られた期間のみの記事を分析するにとどまった。今後は、研究対象の記事の期間をより長く取り、他の歌手との比較分析を行っていかなければならない。また、まだ分析されていないアメリカの映画やドラマ、雑誌におけるナンシーの表象を取り上げ、それを日本における表象の傾向と比べるなど、多角的な面からの研究が必要である。

<注一覧>

- (1) ナンシーという名前については、彼女がアメリカの漫画『ナンシー』に似ていることから軍曹によって名付けられたという（「降ってきたアカデミー賞」『サンデー毎日』1958年4月13日, 30.）。
- (2) 「オスカー女優 古里万感 小樽出身・ナンシー梅木さん死去」『北海道新聞』（小樽・後志版）2007年9月7日朝刊.
- (3) 「故郷恋うナンシー梅木 オビー氏と幸福な生活」『週刊東京』1959年9月26日, 57.
- (4) 「女性シンガーの新星 ナンシー梅木」『スイング・ジャーナル』1950年1月, 18-19.
- (5) 「ジャズシンガー告知板」『アサヒグラフ』1950年10月, 16-17.
- (6) 「私の顔 ジャズ」『家庭よみうり』1953年8月11日, 10-11.
- (7) 「お客さまたち」『映画と演芸』1954年3月陽春増大号, 34.
- (8) 「ナンシー梅木にきく ジャズシンガーに20の質問 その生活と意見」『ミュージック・ライフ』1955年9月, 46-47.
- (9) 「ナンシー梅木 ユニヴァーサル映画に出演 渡米した彼女から第1,2信」『スイング・ジャーナル』1956年1月, 27.
- (10) 「アメリカよりナンシー梅木さんからののお便り」『ミュージック・ライフ』1956年7月, 39.
- (11) 「ナンシー梅木 ユニヴァーサル映画に出演 渡米した彼女から第1,2信」『スイング・ジャーナル』（1956年1月, 27）には、ジャズ歌手のメル・トーメと、「アメリカよりナンシー梅木さんからののお便り」『ミュージック・ライフ』（1957年1月, 23）には、サクソ奏者のスタン・ゲッツ、ジャズ・ピアニストのジョージ・シアリング、エロール・ガーナーと共に収まった写真が載せられている。
- (12) 「アメリカよりナンシー梅木さんからののお便り」『ミュージック・ライフ』1956年4月, 31.
- (13) 「アメリカよりナンシー梅木さんからののお便り」『ミュージック・ライフ』1956年7月, 39.
- (14) 「アメリカよりナンシー梅木さんからののお便り」『ミュージック・ライフ』1956年10月, 24.
- (15) 「アメリカよりナンシー梅木さんからののお便り」『ミュージック・ライフ』1957年1月, 25.
- (16) 「私は発見した “女シナトラ” ナンシー・梅木」『週刊東京』1958年4月12日, 58.、「ジャズ界のパイオニア ナンシー梅木とペギー葉山」『旬刊ラジオ東京』1957年2月11日, 43.
- (17) (8)に同じ
- (18) 「行儀のなおったナンシー梅木—旅はよき人間をつくる—」『週刊新潮』1957年1月21日, 15.
- (19) 「返り咲くかナンシー・梅木 「サヨナラ」ロケで帰国」『週刊東京』1957年1月19日, 58-59.
- (20) 「ジャズ界のパイオニア ナンシー梅木とペギー葉山」『旬刊ラジオ東京』1957年2月11日, 42-45.
- (21) 「ナンシー梅木が獲得 アカデミー女優助演賞」『朝日新聞』1958年3月27日夕刊
- (22) 「時の人 アカデミー最優秀助演女優賞を受賞したナンシー梅木」『毎日新聞』1958年3月28日朝刊
- (23) 「初のオスカー賞に輝くナンシー梅木」『週刊娯楽よみうり』1958年4月11日, 21.
- (24) 「話題の女性 日本人で初めてアカデミー賞受賞のナンシー梅木さん」『婦人生活』1958年5月, 151.
- (25) 「7人のはやりっ児 ナンシー・梅木」『映画と演芸』1958年6月, 20.
- (26) 「セ・ラ・ビー 棚からオスカー」『婦人朝日』1958年6月, 57.
- (27) 「日本人ではじめてアカデミー女優賞を獲得したナンシー梅木」『婦人倶楽部』1958年5月, 147.
- (28) 「降ってきたアカデミー賞 女優助演賞に輝くナンシー梅木」『サンデー毎日』1958年4月13日, 30-31.

- (29) 「アカデミー賞に輝くナンシー梅木 私はラッキー・ガール」『読切倶楽部』1958年6月, 238-239.
- (30) 「ナンシー梅木はツイてる「どうにかなるわ」と言っていた彼女の言葉が本当になった」『文藝春秋』1958年6月, 170-175
- (31) (24)に同じ
- (32) 「早く帰りたいけど 映画の出演交渉だけでも6つ テレビ、レコード次から次へ」『毎日新聞』1958年5月14日夕刊
- (33) 「ラジオ テレビ クラブ アメリカのステージに立って ナンシー・梅木」『放送朝日』1957年3月, 19.
- (34) 「ホーム・スイート・ホーム」『婦人朝日』1958年10月, 81.

### <参考文献>

#### ・日本語文献

- 井桁碧 「敗戦/占領とジェンダーのポリティクス」, 大越愛子, 井桁碧 編著(2005)『戦後思想のポリティクス』, 61-108, 青弓社.
- 片岡義男(2014)『歌謡曲が聴こえる』, 新潮社.
- 久須美英男(2016)「日本のジャズ歌手の草分けにして日本人初のアカデミー賞受賞俳優 小樽出身のナンシー梅木を知っていますか 追補改訂編」, 『BYWAY 後志』, 16号, 94.
- 後藤雅洋監修(2016)『昭和のジャズ・ヴォーカル Vol.2』, 18号, 小学館.
- マイク・モラスキー(2005)『戦後日本のジャズ文化: 映画・文学・アングラ』, 青土社.
- 俣野裕美(2015)「冷戦期におけるマダム・バタフライの表象—テレビドラマ、『ザ・コートシップ・オブ・エディーズ・ファーザー』の日本人女性像を例に—」, 『メディア学』, 30号, 71-90.
- 村上由美子(1993)『イエロー・フェイス ハリウッド映画にみるアジア人の肖像』, 朝日新聞社.

#### ・英語文献

- Hall, Stuart ed. (1997) *Representation: cultural representations and signifying practices*, SAGE.
- Klein, Christina (2003) *Cold War Orientalism: Asian in the Middlebrow Imagination, 1945-1961*, University of California Press.
- Lee, Jonathan H. X. ed. (2017) *Japanese Americans: The History and Culture of a People*, ABC-CLIO.
- Ono, Kent A. and Pham, Vincent N. (2009) *Asian Americans and the Media*, Polity.
- Shibusawa, Naoko (2006) *America's Geisha Ally: Reimagining the Japanese Enemy*, Harvard University Press.

#### ウェブサイト

- ビクターエンタテインメント公式サイト <https://www.jvcmusic.co.jp/-/Profile/A003366>.  
(2018年8月20日閲覧)